# 「男、突っ走る！」

第49回

第一稿

作・壽倉　雅

## 登場人物

木内　雅也（20）　名古屋芸術専門学校２年生

長井　夏美（20）　名古屋芸術専門学校２年生

藤野　真弓（20）　中央高校元生徒（丹崎結役の演者）

清村　有菜（20）　花村京子役の演者

宗田　勝（24）　倉石大輔役の演者

永吉　祐平（24）　加納浩一役の演者

菊村　浩之（20）　店員役の演者

1

展示会場

学生たちの展示会が行われている――来場客にそれぞれ応対しているスーツ姿の学生たち。

イラストや漫画の展示、ゲーム体験ブースなどの設えがされている。小説・雑誌ブースには、雅也の作品集『17年目の秘密』や、歴史雑誌『栄新名所図絵』が展示されている。

映像ブースには、『誓います。』の台本と相関図が資料として設置されている――夏美がやってくると、資料を手に取って見始める。そこへ、雅也がやってくる。

雅也「なつ姐さん、お疲れ」

夏美「お疲れ、うっちー。うっちーのシナリオ集と、雑誌さっき読んできた」

雅也「ありがとう」

夏美「自分のシナリオ集と、あの歴史雑誌もやって、この大久保と一緒のドラマもやっ

たんでしょ。よくやったね」
雅也「この一年は、本当に締切に追われてて、あっという間に時間が過ぎちゃった」
夏美「台本の製本も、うっちーがやったんでしょ？」
雅也「うん。去年、合同文芸誌作ったでしょ。本を作るスキルが、ここで役立った」
夏美「（資料を見ながら）うっちーの高校時代の友達が出演してるんだっけ？」
雅也「そうそう。（と資料を見ながら）このヒロインの友人の丹崎結って役をやって藤野真弓さん」
夏美「へえ」
雅也「主人公の倉石大輔役の宗田勝さんは大久保の大学の同級生で読者モデルやってるの。その読者モデル繋がり出藤野さんと、ヒロインの花村京子役の清村有菜さんを紹介してもらったの」
夏美「あ、この主人公の友人の加納浩一役やってる永吉祐平さんが、大久保の高校時代

の友人だっけ？」

雅也「そうそう。今、名古屋を拠点に舞台俳優やってる。俺が言うのもなんだけど、一番演技が上手かった。それで、居酒屋の店員役の菊村浩之さんっていうのは、本当にここの居酒屋の息子さんで、ロケ協力の繋がりで、急遽出演が決まったの」

夏美「カメオ出演ってやつだ」

雅也「そうそう」

夏美「（モニターを見て）あ、エンディングってことは、そろそろループしてまた最初から流れるんじゃない？」

モニターを見る雅也と夏美――『誓います。』のドラマ本編が映る。

以下、モニター内で映るドラマ本編。

2　公園

ベンチに座っている倉石大輔――何かを考えているような複雑な顔をしている。と、スーツ姿にビジネスバックを

持った大輔の幼馴染・加納浩一が、走ってやってくる。

浩一「悪ぃ、ダイちゃん。遅くなった」

大輔「たった二分の遅刻じゃないか」

浩一「でも遅刻は遅刻だから」

大輔「そうやって時間にうるさいから、コウちゃんには彼女の一人もできないんだよ」

しらけたように黙ってしまう浩一。

大輔「（笑って）ごめん……」

浩一「一番の悩みだったのに……」

大輔「（笑って）ごめんて」

浩一「（開き直るように）まあ、慌てることなんてないんだよ。（と鞄から缶コーヒーを取り出すと）仕事のほうは、どうだ？広告代理店は大変だろ」

大輔「まあな」

浩一「仕事のこともだけど、ほら、付き合ってる女のひとのことはどうなんだよ……名前、何だっけ。ほら、あの……」

大輔「京子のこと？」

浩一「そう、その人。上手くいってるのか？」
大輔「この通り」
　　と、携帯電話で写真を見せる。
浩一「幸せ者だな、ダイちゃんは。もう同棲
　して結構経つだろ」
大輔「そのことなんだけど……」
浩一「……？」
大輔「俺、京子と結婚するんだッ」
浩一「おッ、良いねぇ。だったら、このブラ
　イダルプランナーの加納浩一にお任せくだ
　さい！（と笑う）」
大輔「ありがとう。でも、まだ話し合ってな
　いんだよ。結婚のこと……。俺の中では、
　いつでも、幸せを誓える準備はできてるん
　だけどなぁ……」
浩一「要するに、プロポーズはまだだけど、
　結婚する意志は確かだということだな」
大輔「そういうことだ」
浩一「ほぉ（とうなずく）」

3　飲食店（夜）

大輔の恋人・花村京子が、親友・丹崎結と一緒に、テーブル席で食事をしている――少し酔っている結。

京子「ねえ、結。いつまで別れた彼氏のこと、ぐだぐだ言ってるの。忘れたんでしょ、あの人のこと」

結「忘れたいよッ、私だって。でも、あの男のことが頭から離れないのよ」

京子「それは、まだあの人のことが好きだからでしょ」

結「誰があんな男のこと……。思い出すだけでイライラするんだからね。あんな浮気男、こっちから願い下げだよ」

京子「よく言うわ。結婚を前提に付き合ってたくせに」

結「あの男の言葉に騙されたのよ、私は。幸せを誓ったって、結局は騙されて捨てられるのがオチなんだから……。もう男なんて信じない。結婚してくれって言われたって、

その言葉には騙されないからね（と酒を飲み干す）」

京子「……」

結「京子のほうは、どうなの？」

京子「何が？」

結「まさか、結婚しようなんて言われてるんじゃないよね？」

京子「結婚の話なんてしたことなかったなぁ……。それに私、両親が離婚してるから、結婚が煩わしいって思うんだよね。だから、大輔と結婚っていうのは……」

結「心の中では何を企んでるか分からないよ、男なんてものは」

京子「大輔、どう思ってるんだろ……」

難しい顔の京子。

4　道

大輔と浩一が、歩いている。

大輔「（溜息をついて）どうしたら良いんだろうなぁ……」

浩一「気持ちの覚悟ができてるんだったら、あとは強行突破だろ。同棲を始めた時から、いつかは結婚しようって考えてたんだろ？」

大輔「ああ……。でもなぁ、京子に言える自信がねえよ……」

浩一「言う前からそんなんでどうするんだよ。しっかりしろよ、ダイちゃんッ」

大輔「分かってる、分かってるんだけど」

浩一「（大輔を指さして）そうやって、肝心な時に限って弱くなるところ、昔からの悪いところだぞ」

しょっぱい顔の大輔。

5　アパート・大輔と京子の部屋（夜）

京子が、洗濯物を畳んでいる――突然吐き気を覚え、口に手を当てると、トイレに駆け込む。

6　同・表

大輔が帰宅すると、真剣な顔で、部屋

を見上げている――大きく息を吸って、
階段を上っていく。

7

同・大輔と京子の部屋

京子が、辛そうにトイレから出てくる
――玄関から大輔が帰宅した気配がし、
慌てて何事もなかったような顔で洗濯
物をたたみ始める。
と、大輔が帰宅する。

大輔「ただいま」

京子「お帰り。ご飯は？」

大輔「友達と食べてきた」

京子「そう」

大輔「京子は、飯どうしたんだ？」

京子「私も、今日は友達と食べてきた。前に
会ったことあるでしょ、小学校からの同級
生の結」

大輔「ああ」

京子「結、結婚を前提に付き合ってた彼氏に
一週間前にフラれちゃったんだって。それ

で一緒に飲んできたの」
大輔「じゃあ、結さんは大分飲んだんじゃないのか？」
京子「まあね。（と苦笑すると）お酒の勢いからだとは思うけど、男なんて信用できないって言ってた」
大輔「……」
京子「世の中の男の人全員がそうっていうわけじゃないとは思うけどね」
大輔「……じゃあ、京子は俺の言ったことは信用してるか」
京子「当たり前でしょ。大学に入学してから四年、大輔と同棲してきたんだよ。大輔がどういう人か、分かってるつもり」
大輔「そうか。じゃあ、今から言う言葉、信じてくれよ」
京子「……？」
深呼吸をして目をつむる大輔――脳裏に浩一の声が蘇る。
浩一の声「しっかりしろよ、ダイちゃんッ」

京子「大輔……？」
大輔「……なあ、京子」
京子「何？」
大輔、何かを言い出そうとするが、言い出せないようでうつむく。
京子「大輔……？　どうしたの？」
大輔「京子……俺と、結婚しようッ」
京子「大輔……」
大輔「お願いしますッ」
と、頭を下げる。
京子、唖然と大輔を見つめる――脳裏に結の声が蘇る。
結の声「心の中では何を企んでるか分からないよ、男なんてものは」
しばらく沈黙が続く。
京子「ごめん……」
大輔「（サッと頭をあげると）京子……」
京子「ちょっと、考えさせて……。一週間、時間をちょうだい」
唖然と京子を見つめる大輔。

8　道

京子と結が歩いている。

結「マジ……？　本当に、子どもができたの？」

京子「うん……」

結「大輔さんには、話したの？」

京子「まだ……。言えなかったよ、あんなこと言われて」

結「あんなこと？」

京子「私、プロポーズされたの、大輔に」

結「えッ、プロポーズ……？」

京子「うん……」

結「それで、何て返したの？」

京子「一週間、考えさせてほしいって言った……。そのせいで、この一週間、家にいるとき、すごい気まずい雰囲気だった……」

結「考える時間なんてもらうからでしょ。結婚する気がないんだったら、堂々とその場で、結婚するつもりはありませんって言え

ば良かったんだよ」
京子「でも、大輔は真剣だった……」
結「京子……」
京子「なかなか言い出せなくて、やっとプロポーズをして、頭まで下げたんだよ」
結「それぐらい、大輔さんが本気になってるってことが、伝わったってこと？」
京子「だって、親の離婚で、私が結婚に消極的だったことも察してたと思うのに、それでも、真剣に私とのことを考えてくれてたんだよ、大輔は……」
結「じゃあ、結婚するつもりなの？」
京子「（腹部をさわり）この子を育てたい気持ちはあるし、そのためには、父親だって必要でしょ」
結「シングルマザーがどんなに大変か、京子、自分のお母さん見てきて、よく分かってるもんね……」
京子「ただ、返事を返すうえで、ひとつ不安があるの……」

結「何？」
京子「妊娠のことを告げたら、大輔、どんな反応するかな」
結「そりゃあ、喜ぶでしょ。大輔さんだって、京子と結婚するつもりだったんだから」
京子「子どものために結婚するって思われないかな」
結「考えすぎだって。結婚して家族になるってことは、子どものことも考えるってことだもん。大輔さんなら、それぐらい分かってるとは思うけどね」
京子「……」
結「大丈夫。私も一緒にいてあげるから」
京子「ありがとう」
と、結に微笑む京子。

9　飲食店

大輔と浩一が、テーブル席で待っている。と、店員が入ってきて、
店員「大輔。京子ちゃんが来たぞ」

と、京子と結がやってくる。
京子「お待たせ」
と、席に座る京子と結。
大輔、気まずそうな顔でうつむく。
店員、雰囲気を察すると、
店員「みなさん、時間は気にすることないので、どうぞ、ごゆっくり」
と、一礼すると、出ていく。
浩一「何してるんだよ。（と京子に）ごめんなさい。直接会うのは初めてでしたよね。僕、ダイちゃんの幼馴染の加納浩一と言います」
京子「初めまして、花村京子です。（と結を見て）この子は、私の親友の……」
結「丹崎結です」
浩一「よろしくお願いします。（と名刺を渡して）僕、こういった仕事をしておりまして」
京子と結、名刺を見て、
京子と結「ブライダルプランナー!?」

浩一「ええ。ダイちゃんから、京子さんとの結婚について、いろいろ相談を受けてました。何かとお役には立てるかと思いますが」

京子「……」

浩一「京子さん。ダイちゃんに、一週間前の返事を、聞かせてあげてください。一週間気まずいまま、ずっと待ってたんですよ、ダイちゃんは……」

京子「……」

結「京子……」

京子「……大輔」

大輔「……」

京子「私、母親の手でしか育たなかったから、どうやったら良い奥さんになれるか分からないけど、それでも良いの？」

大輔「ああ……。これから、頑張れば良いんだよ」

京子、一瞬結のほうを振り向く――ゆっくりとうなずく結。

京子「大輔、私は大輔の奥さんになるつもり

で、これから頑張る。何の目標もなく大学に入ったことは無駄だったかもしれないけど、これからの生き甲斐を見つけることができて良かった。ありがとう」

大輔「じゃあ……」

京子「（笑って）喜んで、お引き受けしますッ」

大輔「やったーッ（と勢いよく立ち上がる）」

浩一「ダイちゃん、他のお客さんだっているんだから」

大輔「あ、ごめん。嬉しくて、つい……」

京子「それにね、奥さんになると同時に、私、母親にもなるの」

驚いたような顔でお互いの顔を見合う大輔と浩一。

浩一「京子さん、まさか……」

大輔「京子……？」

京子「うん。今、九週目だって」

大輔「ホントかッ……」

京子「これから、三人で幸せになろうね」

大輔「ああ……」

大輔、感極まって、あわてて涙を拭く。

結「え、大輔さん、泣いてるの？」

大輔「いや……なぜか知らないけど、涙が出てくるんですよ」

浩一「ダイちゃん、こんなところで泣くなよッ。最近ではこういうのを、おめでた婚っていうんだぞ」

大輔、しきりに涙を拭いている。

浩一「昔から全然変わらないんですよ。感動すると泣いちゃうところ。（と苦笑すると）京子さん、こんなダイちゃんですが、一緒に幸せを築いてくださいね。僕も、素晴らしい結婚式になるよう、努力しますから」

京子「よろしくお願いします。（と大輔にハンカチを渡して）いつまで泣いてるの」

大輔「こんなサプライズがあるなんて思わなかったからさぁ……」

笑っている京子。

その二人の光景を見ている浩一と結。

結「（浩一に）この二人、良い夫婦になりま
すね、きっと。二人のために、素晴らしい
結婚式にしてあげてくださいね」
浩一「はい。お任せくださいッ」
結「（呟くように）世の中、良い男の人もい
るんだね」
浩一「絵に描いたような男ですから、ダイち
ゃんは」
と、まだ泣いている大輔を見て苦笑し
ている浩一。
大輔、涙を拭くと、勢い良く立ち上が
り、右手を挙げる。
大輔「俺、倉石大輔は、花村京子さんを幸せ
にすることを、誓います！」
京子「大輔……」
浩一「そうだッ。その意気だぞ、ダイちゃん」
結「じゃあ、二人のこれからの幸せを祈って
お祝いでもしますか」
と、店員がビールとお茶を持ってくる。
店員「そう来ると思って、ご用意致しました

よ。どうぞごゆっくり」
と、出ていく――大輔、京子、浩一、結、それぞれにグラスにビールとお茶を注ぐと、
結「それでは、大輔さんと京子のこれからを祝して、乾杯ッ」
一同「乾杯ッ」
と、グラスを合わせると、飲み始める――それぞれに幸せそうな顔をしているが、中でも大輔の顔が輝いて見える。

13　展示会場（ドラマ終了後）
モニターを見ている雅也と夏美。
夏美「うっちーにしては珍しく恋愛ものだったけど、相変わらず平和な世界線だね」
雅也「ありがとう。大久保のおかげで良い経験ができた」
と、去っていき、展示を見ていく二人。

つづく